

## 「白系ロシア人」音楽家カテリーナ・トドロヴィチの日本滞在(1) —1910年代末までの足跡—

柴 理子 (城西国際大学)

### はじめに

本稿の目的は、第2次世界大戦前の日本でピアニストおよびピアノ教師として半生を過ごした、カテリーナ・トドロヴィチ (Katerina Todorović 1877-1974) の日本における足跡を辿ってみることである。カテリーナは1909年4月、陸軍士官学校および東京外国語学校 (現在の東京外国語大学) にロシア語教師の職を得た夫ドゥシャン・ニコラエヴィチ・トドロヴィチ (Dušan Nikolaević Todorović 1875-1963)、4人の息子たちとともに来日した。以後、戦時色深まるなかでアメリカ合衆国へ去る1940年7月までの31年間を日本で過ごすことになる。本稿では、カテリーナの日本時代の前半にあたる1910年代頃までを扱い、後半については稿を改めて論じたい。

夫ドゥシャンはロシア語教育、妻カテリーナはクラシック音楽と、各々の分野で多くの優れた人材を育てたトドロヴィチ夫妻の功績は小さくないはずである。しかし、筆者の知る限り、夫妻に関する研究はほとんど行われておらず、今のところ、ドゥシャンに関する柴宜弘の論考が唯一のものである<sup>1</sup>。カテリーナについては、主として他の来日音楽家に関する研究の中で、ピアノ教師としての側面が断片的に紹介されているに過ぎない<sup>2</sup>。

カテリーナの出自に関しては、日本ではこれまで「白系ロシア人」と見なされるが多かったようである。日本で生活するうえで、便宜上、彼女自身が

---

<sup>1</sup> 柴 宜弘「ドゥシャン・トドロヴィチーロシア語を教えたセルビア人」柴 宜弘・山崎信一編『セルビアを知るための60章』明石書店、2015年、323-327ページ。

<sup>2</sup> カテリーナに言及している論考としては以下のものがある。山本尚志『日本を愛したユダヤ人ピアニスト レオ・シロタ』毎日新聞社、2004年、同『レオニード・クロイツァー その生涯と芸術』音楽之友社、2006年、同「在日ユダヤ系音楽家問題—ナチス・ドイツの圧力に対する日本側対応の背景」『ユダヤ・イスラエル研究』第17号、1999年、23-31ページ、同「昭和戦前期にピアノを弾いた少女たちの人生と家族と憧憬」『学習院高等科紀要』第12号、2014年、81-99ページ、萩谷由紀子『クロイツァーの肖像—日本の音楽界を育てたピアニスト』ヤマハミュージックメディア、2016年。

そのように称していたということもあり得るだろう。しかし、「白系ロシア人」とは元来、1917年のロシア革命後1921年までの間に、ソヴィエト政権を受け入れず国外に亡命したロシア人を指している<sup>3</sup>。ロシア革命の8年も前の、1909年にロシアを出て日本に来たカテリーナは、そもそもこのカテゴリーには当てはまらない。来日のきっかけも、いわば夫の転勤や転職に伴って他の土地に移ったというのと同様であって、後述するように、来日後も親族との連絡を絶やさず、自分の子どもを郷里に行かせたりしており、亡命者という要素はどこにも見当たらない。しかし、日本にいる間にロシア帝国は崩壊、ソヴィエト政権の成立後には、自らの意思のいかんにかかわらず国籍選択の岐路に立たされる。さらに、再移民先のアメリカでは新たにアメリカ市民権を得て、日本における滞在期間とほぼ同じ30年余りをアメリカ人「キャサリン・トドロヴィク」<sup>4</sup>として過ごす。二つの世界大戦をはさんで、ヨーロッパ、アジア、アメリカという三つの大陸を渡り歩き、日本においては明治・大正・昭和という三つの時代を過ごしたカテリーナのアイデンティティは、単純に「～人」という一つの枠にはめて理解し得るものではないように思える。ここでは「白系ロシア人」という枠をいったん外し、カテリーナのほぼ1世紀に及ぶ生涯を可能な限り実証的に再現することを当面の目標としたい。

なお、本論文のための資料調査の過程で、幸いにも、トドロヴィチ夫妻の子孫にあたるデйна・トドロヴィク (Dana Todorovic) 氏、マイケル・トリップ (Michael Tripp) 氏を探しあてることができた。両氏は夫妻に関わる数多くの貴重な資料と情報を惜しみなく提供してくださり、筆者の質問にも快く答えてくださった。ここに記して、心からの感謝を表したい。また、明治～昭和の音楽雑誌など音楽関係資料の調査においては、明治学院大学図書館附属日本近代音楽館で多くの貴重な資料を閲覧することができ、館員の皆様からは懇切丁寧な御助言をいただいた。心より御礼申し上げます。

---

<sup>3</sup> 沢田和彦『白系ロシア人と日本文化』成文社、2007年、1ページ。

<sup>4</sup> 日本滞在中、夫妻は欧文の書類では自身の苗字を Todorovitch と綴っており、当時の日本語の新聞や雑誌では多くの場合「トドロウィッチ」と表記されている。英語には語尾の é という文字がないため、親族のデйна・トドロヴィク氏 (後述) は、é を c に置き換えて「トドロヴィク」と発音している。

## 1. 来日まで

### (1) 生い立ち

カテリーナの生い立ちについては、これまでのところ、詳細はあまりわかっていない。カテリーナ自身には積極的に文筆活動を行なった形跡がなく、その経歴を明らかにし得る資料がなかなか見つからない。手始めにアメリカの家系・ルーツ検索サイト「アンセストリー・ドット・コム Ancestry.com」で調べたところ、カテリーナは旧姓をシュレジンガー (Schlesinger, Schlezinger) といい、1875年9月14日ウクライナのオデッサ州キリヤにて出生とある。生年はおそらく誤記で、正しくは1877年と思われる。カリフォルニア州コルマのセルビア人墓地に眠るカテリーナの墓の墓碑銘には、生年が1877年と刻まれている<sup>5</sup>。1930年7月に渡米した際に乗船した「浅間丸」の乗客名簿の年齢欄が52歳となっていることも、その裏付けになるだろう。

トリップ氏によれば、カテリーナの父ヤコブと母リフカはともにユダヤ系であるという<sup>6</sup>。ただし、両親は同郷ではなかったようで、1916年12月、カテリーナ自身が新聞のインタビューの中で、自らの出自について次のように語っている。

私の母は羅馬尼の人で羅馬尼には親戚も多く居ますが、父は露西亜の人ですから私は羅馬尼生れとは申すものゝ生れて一年居ました許りで露西亜に行つて露西亜で育ち且つ教育されたものですから羅国に就てはお話する程多くを有つて居りません。併し、露国から多くも離れてゐない、美しいあの国には夏休みを利用して度々参つて叔母の家に逗留して山美しい本当に明媚とも申すべき自然の風光に接する事を楽しみとしました<sup>7</sup>。

このインタビュー記事は、見出しに「羅国人トドロウイッチ夫人語る」とある。ルーマニアは第1次世界大戦の開戦時に中立を宣言していたが、1916年8

<sup>5</sup> 「ファインド・ア・グローブ Find a Grobe」というサイトでカテリーナの眠る墓の画像を閲覧できる。

<sup>6</sup> Michael Tripp, “Jewish Connections” (unpublished).

<sup>7</sup> 『東京朝日新聞』1916年12月8日付朝刊。

月になって連合軍側に参戦した。しかし、独逸同盟軍の反撃に遭ってついには首都ブカレストが陥落したことから、ルーマニア人の生の声を聴くという目的で取材が行われた模様である。当時、カテリーナがルーマニア人として知られていたことが窺われる証左にもなっていて興味深い。

カテリーナの出生地キリヤは、現在はウクライナ領となっているが、歴史的に見るといわゆるベッサラビア地方の南部にあたり、トルコ・ルーマニア間、ルーマニア・ロシア間で絶えず領土争いの対象となってきた境界地域にある。19世紀に入ってからベッサラビアの帰属はめまぐるしく変わり、キリヤは世紀初頭にロシア領となったが、1853-1856年のクリミア戦争でロシアが敗北したことにより、1856年にルーマニアへ割譲された。1930年の浅間丸の乗客名簿に、カテリーナは出生地を「ベッサラビアのキリヤ」と申告しているが、実際、そう書かざるを得ないような状況だったのである。1878年のベルリン会議の決定によってキリヤは再びロシア領となるが、カテリーナが生まれた1877年9月の時点ではまだルーマニア領だったはずで、「羅馬尼生れ」という上記のカテリーナの言とも合致する。「母親は羅馬尼の人」であることを考え合わせると、キリヤは母の郷里という可能性もあるが、現時点では断定し得る材料がない。トドロヴィチ夫妻が永久に日本を去った日、1940年7月31日に乗船した「新田丸」の乗客名簿に、カテリーナは「人種・民族 (race, people)」を「ルーマニア人」と記入している<sup>8</sup>。若くしてキリヤを離れ、生涯のほとんどを外国で送ったカテリーナであるが、様々な土地を転々としても、生まれ故郷への愛着は変わることはない根っこのようなものだったのではないか。

インタビュー記事でもう一つ検討の余地があるのは、「生れて一年居ました許りで露西亜に行って露西亜で育ち且つ教育された」という部分である。カテリーナは5人きょうだいの長女で、下に2人ずつ弟妹がいた<sup>9</sup>。「アンセストリー・ドット・コム」によると、すぐ下の妹クララの出生地は不明だが、1881年生まれの上の弟ボリスの出生地はオデッサであり、おそらくはここが一家の引越し先であると思われる。同じ黒海沿岸にあり、カテリーナの言う「ルーマニ

<sup>8</sup> 「アンセストリー・ドット・コム Ancestry.com」で閲覧可能である。

<sup>9</sup> トリップ氏によると、クララとエリザベータの間にもう一人妹がいたが、名前も生年月日も特定できていないという。

アへ夏休みを利用して度々行ける」距離だからである。ただし、1887年に誕生した末の妹エリザベータはキリヤ生まれとなっており、そうだとすると一家は1878～1887年のいずれかの年に再びキリヤに戻った可能性もあることになる。それとも、母親だけが出産のために戻ったということなのか、いずれにしろ今は判断材料がない。さらに、1890年生まれの末弟のアニシムの出生地はオデッサになっており、1878年にキリヤを離れた後の一家の動静については不明な点が多いが、少なくとも一家がオデッサを一つの拠点として暮らしていたことは間違いないと思われる。

一家がどのような経緯でオデッサに移ったのかは定かではないが、ユダヤ人にとってロシア帝国最大の中心地だったという理由もあるかもしれない。カテリーナが後年、息子のヤコブに語っているところによると、彼女の音楽上のキャリアもオデッサから始まっている。当地の何人かの高名な教師についてピアノの基礎を学んだ後、父親がウィーン音楽院に留学させてくれたのだという<sup>10</sup>。同じロシア帝国内のペテルブルクやモスクワではなく、帝国外のウィーンを留学先に選んだのは、オデッサのピアノの恩師の薦めもあったかららしい。

ウィーン音楽院ではピアノをロベルト・フィシュホフ (Robert Fischhof 1856-1918) に師事し、副専攻の和声学、音楽史、室内楽などとともに優秀な成績を得て、1900年に卒業している。指導教授のフィシュホフ自身、ウィーン音楽院の出身であり、ピアノを教則本で有名なカール・チェルニー (Carl Czerny 1791-1857) の教え子アントン・ドーア (Anton Door 1833-1919) に学び、卒業後にはさらに、ピアノの名手としても知られる作曲家フランツ・リスト (Franz Liszt 1811-1886)、ポーランド系の名ピアノ教師テオドル・レシエティツキ (Teodor Leszetycki 1830-1915) の下で研鑽を積んでいる。リストとレシエティツキは共にチェルニー門下、そのチェルニーはベートーヴェン門下だったという系譜を考えると、そこに連なるカテリーナは、クラシック音楽の本場ヨーロッパでも正統派の音楽的伝統と演奏技術を受け継ぐ存在だったと言えるだろう。

ちなみに、カテリーナの弟アニシムも音楽家で、ロシアでは名を知られた指揮者・作曲家だったようである<sup>11</sup>。また、妹のクララは当時のベッサラビアの中

---

<sup>10</sup> カテリーナ直筆と思われるメモより (ダイナ・トドロヴィック氏提供)。

<sup>11</sup> アニシムは1930年代初め、日本初のプロのオーケストラである新交響楽団の客演指揮

心都市キシノウ（キシニョフ）で教師をしていたらしい<sup>12</sup>。カテリーナの父親の職業は定かではないが、子どもたち一人一人に男女の別なく十二分な教育を受けさせ、留学をさせる余裕もあったのだから、相当に裕福な家庭だったのであろう。

## （2）トドロヴィチ夫妻の出会いと来日の経緯

1933年にベオグラードの日刊紙『ポリティカ』の東京特派員として来日したブランコ・ヴケリッチ（Branko Vukelić 1904-1945）は、1934年7月2日付の同紙に、カテリーナの夫ドゥシャン・トドロヴィチが自らの経歴について語った次のような談話を紹介している。

セルビアを離れたのはまだ19歳の若者のときで、高校を出てベオグラード大学工学部の第一学年を終了してからだ。ロシアで、ペテルブルクで、大学を卒業し、物理と数学の博士号を取得した。その頃、妻と知り合った。彼女は若い音楽家で、ウィーン音楽院を卒業するところだった。私たちはロシアで10年ほど暮らしたが、私は1909年に日本政府の招きで、東京の士官学校でロシア語の教官となった。少しして東京の国立外語大学のスラヴ学教授に任じられた。去年の夏がちょうど20年勤続だった。そして、この4月で日本に上陸してから25年になった<sup>13</sup>。

これはドゥシャン自身の口から語られた数少ない証言として貴重であり、短い中にもトドロヴィチ夫妻の出会いと来日の経緯に関するいくつかの重要な情

---

者として来日する予定もあった。この話は結局、途中で立ち消えになったようであるが、詳細については別稿で論じたい。

<sup>12</sup> イスラエルのヤド・ヴァシェムのホロコースト犠牲者のデータベースに、クララに関する記録がある。クララの娘エカチェリーナが第2次世界大戦後にヤド・ヴァシェムに報告したもので、クララは第2次世界大戦中の1942年に夫とともにキシノウで殺害されたとある。

[http://yvng.yadvashem.org/index.html?language=en&advancedSearch=true&sln\\_value=Roz\\_Gorenstein&sln\\_type=synonyms&sfn\\_value=Ecaterina&sfn\\_type=synonyms](http://yvng.yadvashem.org/index.html?language=en&advancedSearch=true&sln_value=Roz_Gorenstein&sln_type=synonyms&sfn_value=Ecaterina&sfn_type=synonyms)

（2016年6月30日閲覧）

<sup>13</sup> 山崎洋編・訳『ブランコ・ヴケリッチ 日本からの手紙 ポリティカ紙掲載記事（1933～1940）』未知谷、2007年、120ページ。

報を含んでいるが、残念なことに時日はほとんど示されていない。そこで、他の情報とも突き合わせながら、時系列的に整理してみる。ドゥシャンは、1875年2月22日、セルビアの首都ベオグラードに生まれたセルビア人である<sup>14</sup>。ロシアに留学したのは1894年、ペテルブルクの大学を卒業したのは世紀が変わる頃であろうか。ドゥシャンの言葉に従えば、それとほぼ同じ頃に、ウィーン音楽院の卒業を控えたカテリーナと出会ったことになる。既述のように、カテリーナが音楽院を卒業したのは1900年だから、ここまでは言葉通りに解釈が可能である。

しかし、このドゥシャンの話には語られていない事実がある。カテリーナはドゥシャンと出会う前にヨセフ・コーガンというユダヤ人と結婚していて、1902年9月、ヨセフとの間に一人息子ヤコブをもうけているのである。前出のトリップ氏はこのヤコブの令孫である。トリップ氏によれば、カテリーナとヨセフはヤコブがごく若い頃に離婚したのだという<sup>15</sup>。他方、ドゥシャンのほうも、1902年10月、別の女性との間に息子ヴァレリアンが生まれており、1904年5月には次男ドラグティンも誕生している。筆者が調査の過程で知り合ったもう一人の親族ダイナ・トドロヴィク氏はドラグティンの令息である。ドゥシャンの二人の息子の母親がどんな女性だったのか、いつ頃出会ったのか、現時点では残念ながらまったく情報がない。

「アンセストリー・ドット・コム」の情報によれば、カテリーナの息子ヤコブの出生地はベッサラビアのイズマイル、ドゥシャンの二人の息子の出生地はセルビアのニシュである。上のドゥシャンの談話からは、カテリーナとドゥシャンが出会った場所はペテルブルクとも読めるのだが、二人の接点がどこにあったのかがまったく浮かび上がってこない。ドゥシャンの言葉通り、最初の出会いが1900年前後という可能性はあるにしても、1909年の来日以前に彼らと一緒に「ロシアで10年ほど暮らした」というのはどう考えても無理がある。1905

---

<sup>14</sup> JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.A10113356400、叙勲裁可書・昭和十五年・叙勲卷二十・外国人一(国立公文書館)

<sup>15</sup> カテリーナは離婚後もヨセフとの連絡を保ち、日本に移った後もヤコブを父親に会いに行かせている。1917年に父子が会ったときに撮影された写真が残っている。カテリーナはウクライナ在住の自分の親族とも連絡を欠かさなかったようであり、ドゥシャンとの間に生まれた末息子のヴィクトルがカテリーナの妹エリザベータの二人の娘とオデッサで撮った写真がある。

年にイズマイルで撮影された、幼い息子と二人で写っている写真が残っていることから推測すると、カテリーナはおそらくこの頃にはまだベッサラビアにいたのではないだろうか。ドゥシャンの次男ドラグティンの誕生が1904年5月、さらに1907年12月にはドゥシャンとカテリーナの間の唯一の息子ヴィクトルが生まれていることをふまえると、二人が知り合ったのは早くても1905年前後、そこから1907年初め頃までの間と考えるのが常識的な線であろう<sup>16</sup>。これも推測でしかないが、ロシアに深い関わりを持つ二人がともにロシア人ではなく、ドゥシャンがセルビアの出身、カテリーナがロシア領とはいってもむしろバルカン半島に近いベッサラビアの出身であったことも、二人が意気投合した一因だったのではないかと思える。

日本に来ることになったきっかけをドゥシャンは「日本政府の招きで」と言っているが、具体的には東京外国語大学露語科教授の八杉貞利（1876-1966）の仲介で来日が決まったようである<sup>17</sup>。ロシア語の専門家の八杉が太鼓判を押したのであるから、ドゥシャンのロシア語の実力はおそらくネイティブの中にあっても遜色のないものだったのであろう。だが、それにしても、わざわざロシアに行きながらロシア語のネイティブではなく、よりによってセルビア語を母語とするセルビア人のドゥシャンをロシア語教師として日本に連れてくるという、八杉のやや突飛とも思える行動がなかったら、トドロヴィチ夫妻の運命はまったく違ったものになっていたであろう。

とにもかくにも、二人は再婚同士のいわゆる「子連れ結婚」で家族となり、1909年4月、夫婦に息子4人の一家6人で日本の土を踏むことになる。

## 2. 1910年代前半までの演奏活動

### (1) 日本楽壇へのデビュー

カテリーナは従来、華族など戦前の上流社会の子女を教えたピアノ教師とし

---

<sup>16</sup> トリップ氏によれば、一家は20世紀初頭にはハバロフスクに移動していて、そこから日本にやってきた可能性があるという。そうだとすれば、ドゥシャンが八杉と知り合ったのはハバロフスクかもしれない。

<sup>17</sup> 柴、前掲論文、325ページ。



て知られてきた。井上園子（1926-1986）、織本豊子（のちのクロイツァー豊子、1916-1990）、寺西昭子（1928- ）<sup>18</sup>らの優れたコンサート・ピアニストや教育者を育てた手腕は高く評価されているようである。しかし、カテリーナが日本における自身の活動をコンサート・ピアニストとして開始したことは意外に知られていない。本稿ではまず、日本滞在の前半にあたる 1910 年代末頃までの演奏活動について見ておきたい。

現時点で判明している限りでは、カテリーナの日本における最初の演奏記録は、1909 年 7 月 3 日に開催された「露国観光団」の歓迎会である<sup>19</sup>。すなわち、日本に来て 3 か月後には早くも演奏活動を開始していたことが確認できるのだが、これは不慣れな土地での幼子 4 人を抱えての生活が始まったばかりという事情を考えると、驚くべき早さと言うべきだろう。ただし、日本楽壇への本格デビューと言えるのは、同年 12 月 16 日に出演した第 52 回明治音楽会と思われる。明治音楽会は 1898 年 1 月、東京音楽学校主事の上原六四郎（1848-1913）を会長として発足したもので、東京音楽学校の奏楽堂などを会場として月 1 回程度開かれていた。鹿鳴館を本拠として行われていた大日本音楽会が上流階級の社交場という色彩が強かったのに対し、明治音楽会は知識階級の意欲的な集まりという性格のものだったという<sup>20</sup>。当時、東京音楽学校関係の各音楽会、海軍軍楽隊が日比谷公園で行っていた公園演奏、そしてこの明治音楽会の 3 つが東京の主要な音楽会だった<sup>21</sup>というから、カテリーナはまさにメジャー・デビューを果たしたことになる。ちなみに、このときの演奏曲目は、ショパンのト短調のバラードとリストのハンガリー狂詩曲第 12 番であり、この 2 曲は以後も機会ある毎に弾くカテリーナの重要なレパートリーとなる<sup>22</sup>。

---

<sup>18</sup> 寺西昭子氏はカテリーナの日本における最後の教え子の一人であり、カテリーナの人となり、レッスン風景などについて、カテリーナを直接知る人ならではの貴重なお話を伺うことができた（インタビュー：2016 年 2 月 11 日、8 月 6 日）。心からの感謝を申し上げます。

<sup>19</sup> 『東京日日新聞』1909 年 7 月 4 日付。

<sup>20</sup> 増井敬二『日本のオペラー明治から大正へ』（財団法人民主音楽協会創立 20 周年記念出版）民音音楽資料館、1984 年、77-79 ページ。

<sup>21</sup> 同上書、142 ページ。

<sup>22</sup> 『音楽界』、第 3 巻第 1 号、1910 年 1 月。木下由香氏によれば、リストのハンガリー狂詩曲は日本初演であった（木下由香「日本におけるフランツ・リストの受容—明治・大正期の音楽雑誌を中心に」『仁愛女子短期大学研究紀要』平成 23 年度、第 44 号、57-70 ページ）。

明治音楽会は一人の演奏家によるソロ・リサイタルではなく、会員および来賓による管弦楽の演奏が行われ邦楽も必ず含まれるという、複数の演奏家によるジョイント・コンサート形式で行われていた。カテリーナの出演回は「ビ子キッチ氏」「ツブラキッチ氏」という二人のヴァイオリニストが共演者であった。『読売新聞』によると、カテリーナは明治音楽会からわずか3か月後の翌1910年2月19日にも「露国大使の賛助を得てツブラキッチ氏ヴィヌキッチ氏と協力し海軍将校遺族救護の目的にて」慈善演奏会を開催しており、内外の紳士淑女160名余りの来場者で盛会を極めた、とある<sup>23</sup>。カテリーナは、ベートヴェンのヴァイオリン・ソナタ第9番「クロイツェル」の伴奏に加えて、バッハ、ショパン、リスト、チャイコフスキー、ラフマニノフなどのピアノ曲を9曲弾いており、『音楽界』誌上で「ト夫人の『ラプソディ。』『トカータ、アンド、フュグ』 ヴキロギエチ氏の『クロイツェルソナータ』タルティニ氏のソナータの如き最も喝采を博せり」と評されている<sup>24</sup>。

このように、カテリーナの日本における音楽家としての活動は、まずは上々の滑り出しだったといつてよい。とりわけ、来日まもないこの時点で上記の二人の人物と出会ったことは、カテリーナの日本における音楽家としての活動のみならず、慈善活動など他の活動を行ううえでも、きわめて重要な意味を持つことになるのである。

上記の二つの演奏会の共演者の一人「ツブラキッチ氏」は、日本の新聞や音楽雑誌ではツボラウィッチ、ツボラヴィッチ、ドヴブラキッチ、ドゥブラヴィッチなど様々な表記がなされているが、当時「宮内省式部職雇音楽教師」として管弦楽の教育にあたっていたヴィルヘルム・ドゥブラヴチッチ (Wilhelm Dubravčić 1868-1925) のことである。彼は宮内省雅楽部(1912年から楽部に改称)のオーケストラの指導と指揮という日課をこなしながら、上記のような演奏活動も活発に行っていた。宮内公文書館所蔵文書によると、ドゥブラヴチッチは1868年12月23日、オーストリア・ハンガリー帝国のフィウメ(Fiume)

---

ージ)。

<sup>23</sup> 『読売新聞』1910年2月20日付。

<sup>24</sup> 『音楽界』、第3巻第3号、1910年3月。「ラプソディ」はリスト「ハンガリー狂詩曲第14番へ短調」、「トカータ、アンド、フュグ」はバッハ=タウジヒの「トッカータとフーガニ短調」である。

に生まれ、1887年にウィーン音楽院を卒業、1890～1892年ワルシャワ帝室劇場でヴァイオリン奏者としてのキャリアを積んだ後、1901年5月に同郷の妻アンナとともに来日している<sup>25</sup>。以後、2年ごとに契約を更新しながら、1925（大正14）年7月18日、在職中にこの世を去るまで日本における西洋音楽の発展を支え続けた。

「奥太利国人」として日本に来たドゥブラヴチッチであるが、出身地のフィウメは、現在はクロアチア領になっているアドリア海沿岸のリエカ(Rijeka)という港町である。ドゥブラヴチッチという姓からしても、彼が民族的にはドイツ系ではなくスラヴ系（おそらくはクロアチア人）であることは間違いないであろう<sup>26</sup>。この裏付けとなるのは、『ポリティカ』東京特派員のブランコ・ヴケリッチが1935年3月3日付の同紙に書いている、在日チェコ人建築家アントニン・レーモンド (Antonin Raymond 1888-1976) へのインタビュー記事である。ヴケリッチは其中で「東京の宮廷楽団の指揮者だった故ドゥブラヴチッチ氏」を「スラヴ学教授トドロヴィッチ氏」とともに「我が同胞諸氏」と呼んでいるのである<sup>27</sup>。

来日前のカテリーナにとって、ヨーロッパから遠く離れた極東の片隅の日本は、おそらくクラシック音楽という観点からは見当もつかない未知の国だったに違いない。が、いざ来てみると、ウィーン音楽院の先輩にあたるドゥブラヴチッチがいて、日本の音楽界の中核で活躍している！しかも、自分の郷里に近いクロアチアの出身と知って、どんなに安堵し、また心強く思ったことだろう。何のつてもなかった日本でどうにかやっていけるかもしれない、という自信が芽生えたであろうことは容易に想像できる。

周知のように、明治政府は主としてドイツとオーストリアを通じて西洋音楽を導入しようとし、両国出身の「お雇い外国人」を重用した。しかし、彼らの経歴を少し細かく見てみると、従来は「ドイツ人」あるいは「オーストリア人」

---

<sup>25</sup> 『欧州音楽教師雇入録二』宮内公文書館 11564、「ウェルヘルム・ツブラウチッチノ部」。

<sup>26</sup> 名の方は、ドイツ語のヴィルヘルムだけでなく、イタリア語のグリエルモ (Guglielmo) も用いており、イタリア人の血が流れていた可能性があるが、確証はない。松本善三は『提琴有情—日本のヴァイオリン音楽史』（レッスンの友社、1995年）で「イタリア系のオーストリア人」としている。

<sup>27</sup> 山崎洋編・訳、前掲書、196—197ページ。

として知られていた音楽家の中に、ドゥブラヴチッチのような帝国周辺部の出身者が少なからず含まれていることがわかる。例えば、海軍軍楽隊の育成を中心に日本の洋学教育の基礎を築いたことで知られるフランツ・エッケルト（Franz Eckert 1852 - 1916）は、プロイセン領ポーランド出身のドイツ人であるが、生地はノイローデ（Neurode）は、現在のポーランド南西部の小都市ノヴァ・ルダ（Nowa Ruda）、つまりドイツの中心からは遠く離れた、チェコ国境にも近い境界の町である。中村理平氏の研究によれば、確証はないものの、信教がカトリックだった点などからポーランド人だった可能性もあるという<sup>28</sup>。ちなみに、1899年にエッケルトが日本を去ったわずか2年後に、宮内省式部職の仕事を引き継いだのがドゥブラヴチッチである<sup>29</sup>。また、東京音楽学校教授として日本人の草分け的な演奏家を育てたルドルフ・ディットリッヒ（Rudolf Dittrich 1861-1919）も、やはり明治政府の招きに応じて1888年来日したオーストリア人であったが、生地はオーストリア・ハンガリー周辺部に位置するガリツィア地方の小村ビャーワ（Biała）であり、ここも現在ではポーランド領（現在のヴェルスコ・ビャーワの一部）となっている。

このように、明治以後の日本に足跡を残したドイツ、オーストリア、ロシアという諸帝国出身の音楽家の出自については、まだまだ研究の余地があるように思われる。中村理平氏が指摘するように、このことは、彼らが何故にはるか極東の新興国日本を目指したのかを考える手がかりにもなる<sup>30</sup>。また、カテリーナとドゥブラヴチッチのような横のつながりに目を向けることは、中欧地域の大部分が独立を失っていた時代の日本との交流を考える際、中欧という地域の枠組みがどういう意味を持ち得たのかを問い直すことにもつながるのではないだろうか。いずれにせよ、これらは改めて論じるべき問題であり、ここでは指摘するだけにとどめたい。

1909-1910年のカテリーナの演奏活動に話を戻すと、もう一人の共演者の「ピ子キッチ氏」は、ジョルジュ・ヴィニエッティ（George Vignetti）というフラ

---

<sup>28</sup> 中村理平『洋楽導入者の軌跡—日本近代洋学史序説』刀水書房、1993年、350ページ。同書にはエッケルトの経歴や日本における活動が詳述されている。

<sup>29</sup> この間の1900年2月から約1年余りは、ハウス（E.H.House）というアメリカ人が雇われていた。中村理平、同上書、310ページ。

<sup>30</sup> 同上書、350ページ。

ンスのヴァイオリニストである。彼との出会いはカテリーナにとってドゥブラヴチッチとはまた別の意味で重要である。ヴィニェッティの経歴や演奏家としてのキャリアは今日ではほとんど辿ることができず、生没年も不詳である。1909年2月14日付の『萬朝報』に紹介されている26歳という年齢から逆算すると、生年は1883年であろうか。しかし、同紙が「其ヴァイオリンに於ける妙技は佛国音楽界は勿論既に世界各国の音楽家の承認する所にて天才音楽家として其名声隆々たり」と絶賛する記事を掲載しているように、少なくとも1909年の来日公演は大きな話題を呼んだようだ。カテリーナとの共演以前にもすでに、2月19日と3月14日に有楽座、4月27日に帝国ホテル、5月12日に横浜グランド・ホテルで演奏会を開いている<sup>31</sup>。

ヴィニェッティの日本滞在は実に2年余りという長期に及ぶが、これは、彼の姉マリー・ルイーゼ・フラパース（日本名・伊東満里子 1871-1945）が日本海軍軍人の男爵伊東義五郎（1858-1919）に嫁いでいて、当時ちょうど日本に住んでいたことと無関係ではないだろう。ヴィニェッティが1911年3月にいよいよ日本滞在を切り上げてアメリカに行くことになったため、3月4日、伊東夫妻の主催による送別演奏会が、在京浜の内外貴族及び同好者約150名を招待して華族会館で開かれた。カテリーナも出演し、ヴィニェッティとベートーヴェンのヴァイオリン・ソナタ第7番を演奏している。また、独奏曲も2曲弾いているが、そのうちの1曲、ロシアの作曲家アナトーリ・リャードフの「バルカロール」は日本初演であった<sup>32</sup>。会の最後には主催者の伊東夫人自らも登場し、姉弟でヴァイオリンとピアノの二重奏を披露し、「満堂破るるが如き喝采」であったと記事にある。ここからも窺われるように、この送別演奏会は純粋な演奏会というより社交の場という色彩の濃いものであったが、カテリーナにとってはそれがむしろ幸いして、上流社会に多くの知己を得る絶好の機会となったはずである。事実、伊東夫人は、トドロヴィチ夫妻が第1次世界大戦中にセルビア救援組織を立ち上げた際、自ら発起人の一人として名を連ねることになるのである。また、演奏によって本格派ピアニストとしての腕前を印象づけたこと

<sup>31</sup> 増井敬二、前掲書、40ページ。

<sup>32</sup> 大嶋かず路「明治期日本におけるロシア音楽受容—正教会と音楽学校の功績およびその影響関係について」『上智ヨーロッパ研究』(6)、2014年2月28日、165-189ページ。

は、上流階級の令嬢たちにピアノの生徒を獲得していくうえでも重要なきっかけになったのではないだろうか。

## (2) 日本人音楽家との出会い

カテリーナとドゥブラヴチッチは、先に述べた1909年12月と1910年10月の二つの演奏会の後、1912年にカテリーナが出演した3つの演奏会すべてで共演している<sup>33</sup>。たまたま顔を合わせたというより、おそらくはドブラヴチッチがカテリーナのために演奏機会を提供していたと言ったほうがよいのではないか。その最初、3月21日に神田青年会館で開かれた第56回明治音楽会は、『音楽界』が「久し振りにてドブラヴィッチ氏のしめやかなるヴァイオリンの音には天国にても行きたる心地ありき」と書いているところをみると、カテリーナだけでなくドゥブラヴチッチにとっても1910年10月以来の久々の演奏会だったのかもしれない。ピアノとヴァイオリンの独奏に加え、管弦楽あり、弦楽あり、邦楽（長唄）ありの盛り沢山なプログラムで、カテリーナはリストの曲を2曲演奏している<sup>34</sup>。

カテリーナが日本で過ごした20世紀前半の30年間は、日本における西洋音楽の歴史においては非常に興味深い時代である。というのは、洋楽導入の黎明期に学んだ第一世代が現役で活躍する一方、第2次世界大戦をまたいで昭和戦後期まで活躍を続けることになる若い世代も登場してくるからである。カテリーナが日本在住の外国人演奏家や来日演奏家に加え、幅広い年代の日本人音楽家たちとたびたび演奏を共にし、実際に交流していたという事実は注目に値する。

1912年3月28日、カテリーナがドゥブラヴチッチとともに出演した「声楽

---

<sup>33</sup> 第56回明治音楽会（3月21日、神田青年会館）、声楽音楽会（3月28日、帝国ホテル）、好楽会第2回演奏会（5月17日、神田青年会館）の3つ。『音楽界』、第5巻第4号、1912年4月、同、第5巻第5号、1912年5月を参照のこと。好楽会の公演日については、第5巻第4号では5月17日、第5巻第5号では6月17日となっているが、他に資料がなくどちらなのか特定できない。

<sup>34</sup> 「ラプソディ（十一番）」と「ショパンの主題によるポロネーズ」の2曲。後者は1851年に作曲された「2つのポロネーズ」と思われるが、第1番、第2番のどちらを弾いたのかについては記載がない。『音楽界』、第5巻第5号、1912年5月を参照のこと。

音楽会」は、「声楽名家サルコリーの主催」により帝国ホテルで開催された<sup>35</sup>。

「サルコリー」とは、イタリア人テノール歌手アドルフォ・サルコリ (Adolfo Sarcoli 1867-1936) のことである。サルコリは 1911 年秋、演奏旅行で上海に来たが、折から起こった辛亥革命のあおりを受けて契約中止となり、やむなく日本に来たのだという<sup>36</sup>。しかし、偶然訪れた日本にそのまま居を構え、洋楽受容の黎明期にあった日本で多くの声楽家を育てたことから、日本の「ベル・カントの父」と称されている<sup>37</sup>。

「声楽音楽会」で目を引くのは、柴田環、すなわち日本初の本格的オペラ歌手として国際的な名声を獲得した三浦環 (1884-1946) が出演していることである。サルコリと三浦は、1911 年の帝劇 12 月公演でマスカーニ作曲の歌劇「カヴァレリア・ルスティカーナ」の二重唱の部分を中心に歌い、一部分のみの上演ではあったが、日本における最初のイタリア・オペラの舞台を実現させたばかりであった<sup>38</sup>。柴田は 1913 年に結婚した医師の夫とともに渡欧した後、1915 年にロンドン・デビュー、翌 16 年にはアメリカ進出と、海外における活躍の場を着々と広げていくが、カテリーナが共演した 1912 年当時は、帝国劇場歌劇部所属の歌手兼教師として将来を嘱望されてはいたものの、国際的にはまだ無名の存在であった<sup>39</sup>。カテリーナは 1915 年 11 月に有楽座で開かれた「和洋音楽会」でもサルコリと共演しており、その後、器楽奏者だけでなく日本人声楽家と顔を合わせる機会が増えていることからすれば、サルコリとの出会いがその契機となったと考えてよいであろう。

日本人演奏家との関係については、日本初のオーケストラの生みの親としても知られる作曲家・指揮者の山田耕筰 (1886-1965) との共演も特筆に値する。時期的には少し先になるが、カテリーナは 1916 年 3 月 29 日に「東京フィルハーモニー会 第 17 回演奏会」というコンサートに出演している。プログラムはカテリーナのピアノ独奏、ウォーターハウスというアルト歌手の独唱がそれぞれ

<sup>35</sup> 『音楽界』、第 5 巻第 5 号、1912 年 5 月。

<sup>36</sup> 増井敬二、同上書、176 ページ。

<sup>37</sup> 直江学美「日本におけるベル・カントの父、アドルフォ・サルコリの生涯」『金沢星稜大学人間科学研究』第 4 巻第 2 号、2011 年 3 月、41-44 ページ。

<sup>38</sup> 増井敬二、前掲書、175-176 ページ。

<sup>39</sup> 帝劇時代の柴田 (三浦) 環については、田辺久之「三浦環伝記資料考一帝劇時代」『常葉学園短期大学紀要』第 25 号、1994 年、43-65 ページに詳しい。

れ2曲ずつ、他の4曲は弦楽曲で構成されており、弦楽曲の演奏は、山田耕作指揮の「室内楽研究会会員」として弦楽奏者5名にオーボエ、フレンチホルンの計7名の名が挙げられている<sup>40</sup>。ちなみに、カテリーナはヴィオラの佐藤謙三、チェロの多基永とは1918年11月に、第1ヴァイオリンの東儀鉄三郎（1884-）とは1919年12月に再び演奏会で顔を合わせている<sup>41</sup>。

「東京フィルハーモニー会」とは、1910年3月に実業家・岩崎小弥太（1879-1945）らを発起人として設立された音楽鑑賞団体であり、岩崎の出資により帝国劇場を拠点に演奏会を開催し、音楽の普及をはかっていた。岩崎はその一方で、東京フィルハーモニー会の結成に先立つ同年2月、自ら費用を負担して山田耕作をドイツ留学に送り出していた。1914年、4年間の留学を終えて帰国した山田は、12月6日、東京フィルハーモニー会第14回公演として80余名編成の臨時オーケストラを指揮し、日本初の交響曲とされる「勝鬨と平和」（1912年作曲）他の自作曲を演奏した。この演奏会が大成功を収めたことから、山田は常設のオーケストラを「東京フィルハーモニー会管弦楽部」として組織することになり、岩崎からその運営を託される。同オーケストラは翌年5月の試演会を皮切りに、日本初のオーケストラの定期演奏会として6回もの公演を行った。しかし、その翌年1916年の初頭、山田の個人的なスキャンダルが原因で岩崎からの援助が突如打ち切られる事態となり、赤字続きだった東京フィルハーモニー会も解散に追い込まれてしまう<sup>42</sup>。カテリーナが出演した第17回演奏会が開催されたのはまさにこの年の3月であるから、すでに東京フィルハーモニー会の終盤である。会場が帝国劇場ではなく生命保険会社協会に変わっているのも、おそらくは岩崎の援助が途絶えたことの影響ではないかと思われる。

山田による日本初のオーケストラは短命に終わってしまうが、山田はこの後も日本の交響楽運動を牽引し、その活動はやがて日本初のプロのオーケストラ「新交響楽団」の設立として実を結ぶことになる。カテリーナはこうした日本のオーケストラの歴史をその創成期から間近に目撃したばかりでなく、演奏家

---

<sup>40</sup> 「東京フィルハーモニー協会 第17回演奏会」プログラム（ダイナ・トドロヴィク氏提供）。

<sup>41</sup> 『月刊楽譜』、第7巻第12号、1918年12月 および 『音楽界』、第207号、1919年1月。

<sup>42</sup> 増井敬二、前掲書、258-259ページ。



としてそこに関わり、後には新交響楽団と共演を重ねることになる。日本人、外国人を問わず、日本の楽壇にあっては稀有の経験をした演奏家の一人だったといえるであろう。

### 3. 1910年代後半の演奏活動

#### (1) 第1次世界大戦中の動静

第2章で見たように、カテリーナは、明治末期にあたる1909年に来日してからの数年間で、ピアニストとして日本の楽壇に一定の地歩を築くことに成功した。増井敬二は、つづく大正前半期の洋楽界の状況について、明治時代に引き続き活躍した在日外国人音楽家として声楽およびピアノのハンカ・ペッツォルト (Hanka Petzold 1862-1937)、チェロのハインリヒ・ウェルクマイスター (Heinrich Werkmeister 1883-1936)らの東京音楽学校教授陣を挙げたうえで、ドゥブラヴチッチ、サルコリ、カテリーナの3人を「それぞれ演奏活動のほか在野の教師として、昭和期前半の日本を背負うアーティストの育成にも大きな貢献をすることになる」と評している<sup>43</sup>。カテリーナの教育活動については次稿で検討することにして、ここでは演奏活動にしぼって述べることにする。

日本が大正という新しい時代を迎えた頃から、ヨーロッパでは次第に戦雲が漂い始め、1914 (大正3)年にはついに第1次世界大戦が勃発する。トドロヴィチ夫妻の関係国も、セルビアが1914年7月の緒戦から、ロシアが8月から参戦し、当座は中立を守っていたルーマニアも1916年8月に参戦と、ことごとく戦争に巻き込まれていく。こうしたヨーロッパの情勢をカテリーナが遠く離れた日本からどんな思いで見つめていたのか、また大戦中の日々をどのように過ごしていたのかを物語る資料はあまりにも少ない。ここでは、その数少ない手がかりであるカテリーナの演奏会記録と新聞のインタビュー記事を頼りにたどってみる。

理由は定かではないが、カテリーナは1912年の4つの演奏会に出演した後、

---

<sup>43</sup> 同上書、265ページ。

1914年3月7日の明治音楽会第60回演奏会までの間、一度も公的な場で演奏していない。開戦後の動静を伝える最初の情報は『音楽界』1915年12月の短い記事で、それによると、同年10月29日に神田青年会館に「二十世紀社主催音楽会」が開催され、樋口信平、長坂好子、エロシエンコ、三越管弦部員が出演している。樋口と長坂は声楽家、エロシエンコは前年から日本に来ていたエスペランティストで作家のヴァシリー・エロシエンコ（1890-1952）であろう。カテリーナについては何も触れられていないが、夫ドゥシャンについては「塞国人トドロキツチ氏は母国のために悲憤慷慨の大演説を為せり」という記述がある<sup>44</sup>。この時期にドゥシャンが「母国のために悲憤慷慨の大演説」をしたのは、1915年9月にセルビアの隣国ブルガリアが中欧同盟側に立って参戦したために、セルビアがますます窮地に追い込まれることになったからである。セルビア政府と軍は1914年秋、すでに首都ベオグラードからの脱出を余儀なくされていたのであり、1915～1916年には国外に脱出、アルバニアを経てギリシア領のコルフ島を拠点とせざるを得なくなるのである。

1916年12月、ルーマニアの首都ブカレストが陥落した際の新聞報道については第1章でも引用したが、このインタビュー記事の中で、カテリーナは、漁夫の利を狙って十分な準備もなく唐突に参戦したルーマニア政府の行動を痛烈に批判している。

あの綺麗な国が敵軍に蹂躪されてゐる事を考へますと本当に心寒くなりますが今度の事に就て私に言はせるならば私は準備なくして起つた羅国政府が間違つて居ると申します。戦争が始まつて二年、其処に起つ迄の準備はいくらも出来た筈です。而も国民は夫れを知りません。併し私は凡ての事が働いて益をなすものだといふ事を信じて居ります。必ず世界は教へる所のものゝ多い事を信じますが併し教訓を受けるために払つた価は余りに高価である事を悲しみます<sup>45</sup>。

さらに、1917年3月（ロシア歴では2月）にはロシア革命が起こる。肉親の

<sup>44</sup> 『音楽界』、第170号、1915年12月。

<sup>45</sup> 『東京朝日新聞』1916年12月8日付朝刊。

住む国の激動をカテリーナはどのように受け止めていたのだろうか。1917年3月18日付『東京朝日新聞』のインタビュー記事が、その一端を知る手がかりになる。同じ『東京朝日新聞』のインタビューで、前年のルーマニア参戦の際は「羅国人」としての見解を求められ、ロシア革命については「露国人」としての談話になっているのがおもしろい。「露国人」としてのカテリーナは、ロシア大使館の後援で演奏会を開くなど、日本にいた帝政ロシアの代表とは良好な関係を保っていたようである。しかし、帝政崩壊については、「此際露西亜にとっては不幸の出来事で」と言いかけた記者の言葉を遮り、「目出度いのです」と言い切っている。もっと早くからこうならなければならなかった、と言い、「顔には心底からの喜びが溢れ」ていた。これに続く、政府と国民、ロシアの将来について語っている部分が興味深いので引用する。

(…) 今回の戦争に参加してゐるのは予備であつて之は軍人が職業の人ではありません。皆夫夫国民として自由に他に働ける仕事を有つた人々です。従つて政府に向つて民意の自由を云々する権利も有つてゐます。政府は国民の政府です。国民の意思を尊重しない政府専制内閣は国民にとって何でありませう。今度の戦争が従来は独逸に勝たない方法許り執つて来ました。食糧の欠乏を言ふのは妄説です。欠乏ではなくて、政府のやり方が悪いのです。軍需品の供給も同様です。政府は戦勝に不利な組織ばかりを行つて居ますから戦争が何時果てるか今迄の有様は本当に心許ない事のみでした。内閣が變つて政府と民心との並び行はれる之からの露国を考へると心嬉しう御座います。

このように、期待感をもってロシアの将来に目を向けていたカテリーナが、この後のロシア10月革命をどう受け止めたのか、また、自身の生活や活動にどのような影響が及んだのか、それを知るための手がかりは残念ながらほとんど見い出していない。さしあたりわかっているのは、1910年代後半、カテリーナの演奏活動に種々の慈善演奏会が加わってくることである。

1916年3月4日、カテリーナは青山学院講堂で開催された「熊本回生病院寄附慈善音楽会」に出演し、アントニ・コンツキ (Antoni Kątski 1817-1899) の

「ライオンの目覚め 英雄的奇想曲」などを演奏している<sup>46</sup>。熊本回生病院は、イギリス人女性宣教師ハンナ・リデル（Hannah Riddell 1855-1932）が設立したハンセン氏病患者療養施設「熊本回春病院」のことであろう。この病院は当初、イギリスからの寄付金によって運営されていたが、日露戦争での日本の勝利以後はイギリスからの送金が打ち切られ、運営資金を日本国内での寄付金に頼っていたのである<sup>47</sup>。ちなみに、この演奏会は共演者の顔ぶれも興味深い。先述の「二十世紀社主催音楽会」の出演者である声楽家の樋口信平、長坂好子に加え、宮内省楽部出身の音楽家たちによって結成された日本初の弦楽四重奏団「ハイドン・カルテット」の名が見える<sup>48</sup>。

ロシア革命勃発後には、多数のロシア難民が日本に逃れてきた。1917年6月12日、カテリーナはキリスト教女子青年会主催の「YMCA 慈善音楽会」に、声楽家の鈴木信子らと共に出演し、いまや定番の曲となったリヤードフ「バルカロール」、ショパン「バラード」の2曲を弾いている。『音楽界』1917年7月号によれば、これは「戦争の結果飢餓に迫れる露国児童救済」を目的とするものであった<sup>49</sup>。

1918年3月16日には、セルビア支援のチャリティー・コンサートが神田青年会館で開かれている。『音楽界』と『月刊楽譜』にこのコンサートに関する記事が掲載されているが、二つの記事は少々異なっている。『音楽界』によれば、この「塞爾比亜救済慈善演奏会」は「塞爾比亜赤十字社を代表せる塞国救護団主催」であった<sup>50</sup>。前出の柴論文によれば、夫ドゥシャンは開戦間もない1914年10月に、日本赤十字社を通じてセルビア赤十字社に私財150円を寄付してい

---

<sup>46</sup> 「ライオンの目覚め」は現在では忘れ去られているが、当時はしばしば演奏される人気曲だったようである。アントニ・コンツキはポーランド出身のピアニストで、作曲家としてもサロン風の小品を多数作曲している。「ライオンの目覚め」は代表作の一つ。ピアニストとしては1894年の演奏旅行の途次、日本にも立ち寄っており、6月22日に帝国ホテルで開いた演奏会でこの自作曲を弾いている。関根和江「ケーベル先生の『シエルツ』—明治31年の音楽会」『東京藝術大学音楽学部紀要』第33号、2007年、66ページを参照。

<sup>47</sup> 政治家・教育者の大隈重信（1838-1922）、実業家・渋沢栄一（1840-1931）、陸軍大将・児玉源太郎（1852-1906）ら、当時の日本の有力者も後援者となっていた。社会福祉法人リデルライトホーム公式サイトを参照（閲覧日：2016年11月11日）。

[http://www.riddell-wright.com/history\\_riddell.php](http://www.riddell-wright.com/history_riddell.php)

<sup>48</sup> 『月刊楽譜』1916年4月号、25ページ、『音楽界』、第174号、1916年4月。

<sup>49</sup> 『音楽界』、第18巻189号、1917年7月。

<sup>50</sup> 『音楽界』、第198号、1918年4月。

る。それがきっかけとなり、セルビアの窮状を訴えるセルビア赤十字社からの救援要請に応える形で、「塞国救難会」という支援団体を立ち上げている<sup>51</sup>。上記『音楽界』の記事にある「塞国救護団」は、この「塞国救難会」と思われる。

「塞国救難義捐募集」という文書には、カテリーナが賛助者として名を連ねており、同じく賛助者の侯爵夫人鍋島栄子を筆頭とする五人の華族夫人の中には、既述の男爵夫人伊東満里子の名もある<sup>52</sup>。「塞国救難会」は日本国民から義捐金や医薬品、衣類などの救援物資を集めてセルビアに送っており、3月16日の慈善演奏会をそうした活動の一環として開催したことは十分考えられる。一方、『月刊楽譜』には、「有史以来最も悲痛惨烈な戦禍を被った、塞爾維人の為に」「同国人トドロウィツ夫人主催の慈善音楽会が開かれ」とあり、カテリーナをコンサートの主催者としている。カテリーナが「同国人」すなわち「塞爾維人（セルビア人）」というのは誤解だが、この慈善演奏会が「塞国救難会」の主催か否かにかかわらず、実質的にはカテリーナが中心となって企画運営を行ったことは間違いないであろう。

## (2) ポーランド人ピアニスト・ザレスカとの共演

第1節からも窺われるように、カテリーナは第1次世界大戦の開戦後も、内外の演奏家と共演する形でコンスタントに演奏活動を行っている。これまでの調査でわかっている限りであるが、セルビア支援の慈善演奏会を行った1918年はとりわけ活発で、2月7日の明治音楽会を皮切りに、演奏家人生最多の6つの演奏会に出演している。

1910代半ばから後半にかけては第1次世界大戦の影響で演奏家の来日が激減したが、それと入れ替わるような形で、ロシアから革命勃発の直接的・間接的な影響を受けた音楽家が多数来日した。1918年11月2日の慈善演奏会でカテリーナが共演しているバリトン歌手のセリワノフ、ピアニストのスカルスキーはそうしたロシア出身の音楽家と思われる<sup>53</sup>。この時期の共演者としてより興味深いのは、1918年にカテリーナが出演した6回の演奏会のうち3回に登場して

<sup>51</sup> 柴宜弘、前掲論文、325-326ページ。ただし、塞国救援会の設立年月日は特定されていない。

<sup>52</sup> Crveni krst Srbije 11-1tif, Arhiv Srbije.

<sup>53</sup> 『月刊楽譜』、1918年11月号、30ページ、同誌1918年12月号、35ページ。

いる「ザレスカ夫人」である。『月刊楽譜』1918年4月号によると、ザレスカ夫人は「露国の動乱に際し日本に避難しました露国の人士多く其中に、在露の音楽家も数十名来朝し」「その音楽家の中でも頭角を顕はして居ります」「ポーランドの女流ピアニスト」である。さらには「夫人は世界一の女流ピアニストと称せられて居ります」とあり、大変な激賞ぶりである。

上記の記事に記されているように、「ザレスカ夫人」ことヤドヴィガ・ザレスカ (Jadwiga Zaleska 1879-1944) はロシアから日本に来ているが、ロシア人ではなくポーランド人である。初期の経歴はほとんどわかっていないが、『月刊楽譜』の記事によれば、サンクト・ペテルブルク音楽院の創設者のピアニスト・作曲家アントン・ルビンシュタイン (Anton Rubinstein 1829-1894) に師事し、世界的に有名なポーランド系ユダヤ人ピアニスト、ユゼフ・ホフマン (Józef Hofmann 1876-1957) と同門の関係だったという。ポーランド側の資料でも今のところは、1897年2月にクラクフでリサイタルを行ったことが判明しているだけである<sup>54</sup>。18歳で結婚、19歳でトムスクの公立音楽学校の校長に選任せられたという上記『月刊楽譜』の記事の記述どおりに考えれば、クラクフのリサイタルの後まもなくロシアに渡ったと思われるが、これも推測の域を出ない。ロシアではトムスクを拠点にシベリアで活動していたようであるが、来日前は「ペトログラード皇立音楽学校の教授」をしていたとあるから、ロシア音楽界で一定の評価を得ていたのであろう。

日本におけるザレスカの最初の演奏記録は、1918年1月11日に横浜ゲーテ座で開催された「バレエと音楽会」への出演を伝える記事である<sup>55</sup>。『音楽界』1918年7月号の記事「外来楽星の移動」によると、ザレスカは来日後の約5カ

---

<sup>54</sup> Marta Sajdek, „Akcje koncertowe krakowskiego Towarzystwa Muzycznego w ostatnich latach XIX wieku”, *Młoda Muzykologia*, Rocznik 2009, Instytut Muzykologii Uniwersytetu Jagiellońskiego, s.124. ザレスカは結婚後の姓であるが、この演奏会の時点ですでに Iwanowska-Zaleska という、旧姓のイヴァノフスカとザレスカを併記する形になっていることから、ポーランド時代にすでに結婚していたと考えられる。その後（正確な時日は不明）離婚し、画家ヴィクトル・マズロフスキ (Wiktor Mazurowski 1859-1944) と再婚しているが、ピアニストとしては一貫してザレスカ姓を使っていたようである。

Wikipedia ポーランド語版の Wiktor Mazurowski の項に、ごくわずかながらザレスカについての記載があり、1944年のワルシャワ蜂起の際に命を落としたという。

[https://pl.wikipedia.org/wiki/Wiktor\\_Mazurowski](https://pl.wikipedia.org/wiki/Wiktor_Mazurowski) (2016年11月11日閲覧)

<sup>55</sup> 升本匡彦『横浜ゲーテ座—明治・大正の西洋劇場』第2版、岩崎博物館（ゲーテ座記念）出版局、1986年、230ページ。

月間で北は函館から南は福岡まで日本列島を縦断し40回ほどの演奏を開いたというから、現代の人気ピアニスト並みである。カテリーナとの最初の共演は2月23日、ザレスカの東京における最初の演奏会である。第二部にカテリーナが賛助出演し、アントン・アレンスキー作曲「2台のピアノのための組曲第2番 シルエット」などを演奏している。おそらくはこの共演から好感触を得たカテリーナが依頼したのであろう、既述の3月16日開催「塞爾比亜救済慈善演奏会」に、今度はザレスカが出演して独奏・合奏合わせて数曲を演奏している<sup>56</sup>。

日本における洋楽の歴史という観点からより注目に値するのは、1918年5月7日、9日、11日の3夜にわたる「ザレスカ夫人ピアノ演奏会」であろう。ザレスカ単独のリサイタルは2日目の5月9日だけであり、初日と3日目は他の演奏家たちとのジョイント・コンサート形式であったが、その共演者の顔ぶれが興味深い。カテリーナと一緒に演奏した形跡はないが、初日にはピアノの幸田延（1870-1946）、ヴァイオリンの安藤幸（1878-1963）という日本洋楽界の第一人者が出演しているし、カテリーナが出演した最終日の5月11日には、国際的に活躍した日本人ピアニスト第一号とされる小倉末子（1891-1944）が登場している<sup>57</sup>。3日目の演奏曲目を見てみると、小倉とザレスカの組み合わせでラフマニノフの「組曲」（2曲のうちのどちらかは不明）が演奏され、カテリーナとザレスカでチャイコフスキーの「コンチェルト」（何番かは記載なし）、ルビンシュタイン「コンチェルト」（何番かは記載なし）「トレパーク」を弾いており、同時代のロシアの作品を中心に構成されている<sup>58</sup>ことは特筆に値する。カテリーナは1940年に渡米するまで一度も音楽学校などに在籍せず、一貫して在野の音楽家であり続けたため、東京音楽学校の関係者と同じ舞台上で演奏することは稀であった。その意味でも、東京音楽学校の教授陣と共演したこの演奏会は、

---

<sup>56</sup> 1918年2月26日付『東京朝日新聞』は二人の連弾について「第二部曲目最後のアレンスキー作シルエットにトドロウイッチ夫人との二部合奏夫からロシアのダンスで当夜の会を結んだ時聴衆は去り難さうに見江た」という好意的な批評を載せている。

<sup>57</sup> 幸田延、安藤幸の「幸田姉妹」については、萩谷由喜子『幸田姉妹—洋楽黎明期を支えた幸田延と安藤幸』ショパン、2003年が詳しい。ただし、1918年のこの演奏会についての記載はない。小倉末子の経歴と演奏活動については、津上智美・橋本久美子・大角欣矢『ピアニスト小倉末子と東京音楽学校 入学から百年』東京藝術大学出版会、2011年を参照。

<sup>58</sup> 「ザレスカ夫人ピアノ演奏会」プログラム、明治学院大学図書館付属日本近代音楽館所蔵。

カテリーナにとっては非常に珍しい体験となったのである。カテリーナとドゥブラヴチッチの交流がそうであったように、カテリーナとザレスカの出会いもまた、中欧の大部分が独立を失っていた時代の日本・中欧交流史をとらえ直すうえで一つの糸口になり得るのではないかと筆者は考えている。

既述の11月2日の慈善演奏会について伝えている『月刊楽譜』1918年12月号の記事は、カテリーナを「今春以来東都の楽壇にめっきり声名を揚げた」と紹介している。この後、カテリーナは来日後の10年にわたる活動によって獲得した知名度を生かして、ピアノ教育の仕事を本格化させていくことになるのである。（以下次稿）